



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 『春の深山路』における飛鳥井雅有と東宮：蹴鞠の側面から考える                                              |
| Author(s)    | 湯，書華                                                                        |
| Citation     | 演劇学論叢. 2024, 23, p. 40-54                                                   |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/94765">https://doi.org/10.18910/94765</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『春の深山路』における飛鳥井雅有と東宮

―蹴鞠の側面から考える―

湯 書華

はじめに

飛鳥井雅有（二二四一―一三〇二）は、鎌倉時代中期の公家であり、蹴鞠・和歌・古典字の才能をもって鎌倉幕府と宮廷の両方に仕えた。雅有は五つの日記・紀行文（『無名の記』（『仏道の記』とも呼ぶ『嵯峨のかよひ』『もがみの河路』『みやぢの別れ』『春の深山路』）を残している。雅有が著した日記・紀行文の中で、『春の深山路』の内容はもともと充実的であり、「豊潤な作品」と評価されている（飛鳥井雅有日記全釈『解説』）。『春の深山路』の前半三分の二は弘安三年（一二八〇）正月から、雅有が東宮（熙仁親王、後の伏見天皇）御所に仕える日記であり、後半三分の一は同年末、雅有が鎌倉へ東下する旅日記である。

雅有は『春の深山路』の最後に、都から鎌倉に下向する旅を記しながら、東宮への思いや、東宮の即位への強い関

心を表している。雅有の紀行文の中で、都から鎌倉への旅を記すものはほかにも『もがみの河路』『みやぢの別れ』があり、いずれも都への懐かしみを表すが、『春の深山路』のように、都にいる特定の人への思慕や政治的な意向を示すことはない。<sup>①</sup>

本論文では、『春の深山路』における雅有と東宮の親密な関係が形成された経緯について、蹴鞠の側面から考えてみたい。また、『春の深山路』における東宮への思いの表現方法を考察する。最後に、雅有が『春の深山路』を書いた理由について検討する。

## 一、飛鳥井家について

飛鳥井家は雅有の祖父である雅経（一一七〇―一二二二）の代に、雅経が大江広元の娘を娶り、鎌倉と縁を結んだ。そして雅経の子・教定は京ではなく、鎌倉を本拠にして活

動したと推測される（『飛鳥井雅有日記全釈』「解説」<sup>②</sup>）。雅有は父・教定とともに、公家でありながら蹴鞠・和歌の才能をもつて将軍に仕え、二十歳前半までは鎌倉を中心とする生活を送っていた。しかし、文永三年（一二六六）四月、雅有の二十六歳の時に父が急死し、七月には幼少より仕えてきた宗尊親王が将軍を廃されて、京へ送還された。鎌倉では先達・庇護者を失ったためか、この頃から雅有は京と鎌倉の間を往来する生活を送るようになった。

『春の深山路』が記された弘安三年（一二八〇）には、治天と天皇の継承が両統迭立の状態にあった。すなわち、当時は大覚寺統の後宇多天皇が在位し、その父・亀山院が院政を行なっている。一方、持明院統の熙仁親王が立太子され、父・後深草院が亀山院の次に院政をしることが約束されている。飛鳥井家は、雅有が『春の深山路』を記す前に、持明院統・大覚寺統のどちらに傾くのかを明らかに示すことはなく、雅有が弘安三年正月に持明院統の東宮に出仕した一方、雅有の娘が弘安三年正月より前から宰相典侍として大覚寺統の後宇多天皇に仕えているらしい（『春の深山路』正月十三日条）。

蹴鞠は飛鳥井家の家業である。雅有の蹴鞠書『内外三時抄』の序によると、彼の高祖父である藤原頼輔は、蹴鞠の聖と称される藤原成通の弟子であり、成通の推薦によって

後白河院の蹴鞠の師範となったという。

鎌倉時代の鞠会においては、勝負の結果よりも作法の正しさを重視したため、鞠会にはさまざまな作法が必要である。たとえば鞠会の始めに鞠を枝につける「付鞠」、枝に付けられた鞠を鞠場に運んで置く「置鞠」、会場で枝から鞠を解く「解鞠」、プレーの始めに鞠を蹴り上げる「上鞠」、会の最後に鞠を袖に受け取っておさめる「取鞠」などの作法がある（『蹴鞠の研究―公家鞠の成立―』）。その中でも特に「上鞠（あげまり）」が鞠会ではもつとも名誉な役とされ、鎌倉時代の鞠会では、天皇や院が自ら上り鞠をする場合を除いて、上鞠は必ず重代の家のものが勤めることに決まっていた。後述するとおり、飛鳥井家は雅有の高祖父藤原頼輔（一一二一―一一八六）の代から鞠の芸を相伝しており、上鞠を勤める重代の家の一つである。

## 二、雅有と為家・為世

### （一）雅有と為家

雅有の日記に見える都での蹴鞠活動の中では、彼が『嵯峨のかよひ』に記す、藤原為家の小倉山荘で参加した鞠会がもっとも早い。藤原為家の子・為氏が雅有の姉を娶って、為世を産んだことから、為家の御子左家は雅有の飛鳥

井家と縁戚関係にある。本章第二節で詳しく述べるが、為家は蹴鞠に優れ、<sup>(3)</sup>為家以降、御子左家も蹴鞠の重代の家となっている。

『嵯峨のかよひ』は雅有の文永六年（一二六九）の日記である。雅有と為家の関係の良さは『嵯峨のかよひ』によって知られる。雅有は為家を尊敬し、為家は蹴鞠において飛鳥井家の重代の家の地位を認めて、雅有の才能を高く評価している。為家の山荘で鞠会を催した時、主人の為家は雅有が上鞠することを認めている。

## （二）雅有と為世

雅有が作った蹴鞠書『内外三時抄』（正応四年、一二九一年前後に成立）の序によると、飛鳥井家は雅有の高祖父藤原頼輔（一一二一～一一八六）の代から鞠の芸を相伝しているという。

こゝに拾遺亜相<sup>(4)</sup>といふ人あり、この道に独歩して此芸に尊長たり、このわざ古今にこえ、其徳神明に通せり、ふかく未萌をてらして、我跡のつぐべからざる事をおかみ、とをく未兆を察て、他家のつたふべきことを存ず、しかるに高祖父刑部尚書、幸に此芸に達して、ついで其誉をあらはす、亜相これを感じて譜第の

跡とし、これを推て聖皇の師とす、それよりこのかた、当家相續してほどく国師たり。

それに対して、御子左家の蹴鞠書『遊庭秘抄』<sup>(6)</sup>「根源事」によると、御子左家は藤原為家（一一九八～一二七五）の代に初めて蹴鞠の重代の家と認められたという。御子左家の蹴鞠書『遊庭秘抄』でさえも、自らの家の歴史を述べる前に、飛鳥井雅経の名前を挙げている。

卿相に堪能の初なりしは拾遺納言成通卿。地下に無双の上手と申初しは賀茂成平也。明日香井家に蹴初しは参議雅経卿。難波家に揚初しは三品宗長卿也。当流は。中院入道大納言為家卿從<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>後鳥羽上皇勅説。至<sub>二</sub>愚身<sub>一</sub>既五代。

つまり、飛鳥井家が蹴鞠の芸を相伝する歴史は、御子左家より長いのである。また、雅有は東宮の蹴鞠師範であり、さらに為世の蹴鞠の師でもある。このことは次に示す『春の深山路』弘安三年（一二八〇）正月十九日条の傍線部から知られる。

十九日<sup>(7)</sup>。春宮の御鞠始なり。まづ参内。その後坊に参

る。女房「今日御鞠始なり。御師匠の身ながら立たざらむこと本意なかるべし。且は院の御方よりもしきりに仰あり。いかさまにも立つべし。(中略)上鞠すべき由かねて仰せあれども、今日は所望もかなはず、快からねば、為世に譲りて退きぬ。この人親しき上、もとより弟子にてあれば、そのやうとふ教へてせさせぬ。

それゆえに、為家の山莊だけでなく、東宮御所の鞠会においても、雅有が御子左家を抑えて上鞠を勤めることは順当である。

しかし、為家が雅有の上鞠の地位を認め、雅有が為家の前では謙虚な態度を示すという、和氣藹々とした雰囲気とは違い、次に示す『春の深山路』弘安三年三月二十七日条によれば、上鞠をめぐって雅有と為世との間に確執が起る。

廿七日。東宮御鞠なり。大柳の懸にてあるべき由、兼て催さる。初めて近衛の内府参るによりて、引き繕はる。上鞠のことによりて、わゝしきことありしかども、終に勤めぬ。今の世の中、いとうるさきことなり。人に心を許し、たとひ親しき人なりとも、弟子なりとも、打ち解くまじきことにこそ。細かにはむつかしけ

れば、書かず。人々皆知りたることなりかし。

つまり、後深草院御所の大柳の庭で催される、東宮主催の鞠会で、為世と雅有とは上鞠をめぐって何かもめごとがあつたのである。この事件について雅有は詳しく記していないので、一体どういった事件なのか不明である。おそらく、師匠の雅有が出席していたにもかかわらず、為世が上鞠をしたい意思を表したため、確執が起つたのだろう。

前に述べたとおり、家柄の面から言えば、飛鳥井家は蹴鞠の重代の家である。私的な関係から言えば、為世の祖父・為家は雅有の蹴鞠の技を高く評価していた。また、為世は雅有の甥であり、弟子でもある。自分が権威を持つている分野で、親しい弟子と確執が起つたのは、雅有にとって非常に面目のないことだと言えよう。

### 三、雅有と東宮

では、この確執はいかに解決されたのだろうか。

上鞠をめぐる雅有・為世の確執は、雅有が上鞠の役目をするという結末に終わった。雅有は『春の深山路』で淡々としてこの事件を記したが、彼が上鞠を担当すると決断

し、弟子の前に雅有の面目を保ったのは東宮だと考えられている。<sup>(11)</sup>確かに、東宮の前で催された鞠会であるため、たとえ東宮が直接に決断を下さなかったとしても、雅有が上鞠をするという結果には、やはり東宮がある程度関与していたのだろう。

雅有・為世の上鞠をめぐる確執が起こった二ヶ月後、今回の鞠会では御子左家の為氏が世話役を担当することを事前に了承するようにとの手紙が、東宮の女房から雅有に渡されている（『春の深山路』の五月十四日条）。

十四日。朝、東宮の女房より文あり。今日藤大納言為氏卿奉行として、御鞠あるべし、その旨を存知すべき由なり。これは上鞠渡しの後なれば、もし思ふやうな<sup>(12)</sup>どあらばの御用意なれば、殊にかしこまり入る由申す。

前に雅有が為氏の子・為世ともめごとがあったので、東宮はそれを考慮して前もって今回の鞠会の世話役を知らせてきたのだろう。「何か思っていること（御子左家の人が世話役をすることに対して、不安なことや、不満なことを指すだろう）があれば……」との手紙から、東宮の雅有への心遣いが窺われる。手紙をもらった雅有は、東宮の厚意を感じて、こ

の鞠会に参加することにした。

当時、蹴鞠の家の間に上鞠をめぐる確執が起こる事件は珍しくない。『伏見天皇宸記』正応二年（一二八九）三月二日条には、上鞠のことについて難波宗継の不满が見られる。なぜかというとき、伏見天皇は飛鳥井家・御子左家よりも蹴鞠の重代の家である難波家の宗継<sup>(13)</sup>ではなく、御子左家の庶流の京極為兼に上鞠の役目を与えたからである。この記録によつて、伏見天皇が必ずしも蹴鞠の家柄をもつて上鞠の人を選ぶわけではないこともわかる。

右の正応二年の時は、上鞠を為兼に指名する理由について、伏見天皇はその日、為兼が上首に座っていたからだとして、『伏見天皇宸記』に記す。しかし、為兼の正応年間の政治上での活躍がめざましいことを考案すれば、果たして上首に座っていたという理由のみであったのだろうか。それとも政治的な考えもあったのだろうか。

いずれにせよ、宗継は伏見天皇の決断に納得できなかった。次に引用する『伏見天皇宸記』によれば、自ら鞠庭<sup>まうら</sup>に入つて懸<sup>かけ</sup>の下に立ち、数刻待ってからようやく呼び戻されるなど、おかしい振る舞いをしたという。

三月二日辛巳、晴、於大柳有蹴鞠、花山院大納言、前源宰相、為兼朝臣、為雄朝臣、範藤朝臣、為雅朝臣還

參、為実朝臣、宗繼朝臣今日可上鞠之由所望、而為内々儀就上首可為兼朝臣之由  
仰之、及再三問答、猶不聽之、宗繼朝臣進出立風吹之懸下之後、數刻待之、猶召返、尾籠奇怪事也

間鞠不上、及酉半風頗靜、欲昏事了、

正応二年のこの事件から類推すれば、弘安三年の為世・雅有間の確執においても、東宮（後の伏見天皇）が雅有のほうに傾いた理由は、飛鳥井家の蹴鞠の家柄によるわけではなく、ほかの要素を考えていたためだろう。

つまり、断言できないが、東宮が雅有に加担する理由の中には、政治的な考えもあったのではないかと推察できるように思われる。

『春の深山路』の弘安三年六月二十一日条によれば、雅有は鎌倉側より、下向を要請する手紙をもらっている<sup>17</sup>。十月二十六日に、雅有は後深草院の方から東下の延期を要請された。しかし、関東祇候の廷臣である雅有にとって、東下を延期することは難しかった。

十一月十四日、雅有は都を出立する。その前日に『春の深山路』には「東宮御前にて、関のあなたにて申べき事書など、賜ぬ」という記録がある。東宮は雅有を通じて鎌倉幕府に何かの事項（皇位継承に関することだろう）<sup>18</sup>を伝えてい

るようである。

十一月二十六日、雅有は鎌倉に着く。十一月十四日から二十六日までの記録については次の第四章で詳しく検討するので、ここではまず、雅有が鎌倉に着いた後、東宮からもらった手紙を見てみよう。

次に引用する『春の深山路』十二月晦日条には、東宮からの文をもらったことが記されている。そこには雅有が東下した後に東宮が詠んだ歌も記されていた。引用に傍線を附した和歌は、「今でもやはり木綿付鳥のように泣いているであろうか、出発の前に言っていたことにたがわぬ心であるならば」（「外村南都子校註・訳『春の深山路』」）という意味である。東宮の雅有への思いが深く、傍線を附した和歌から「前に都にいた時の心（持明院統に傾く心を指すだろう）が変わらなければ……」というニュアンスも読み取れるだろう。

京より文どももあり。見れば「東宮の御方より」とてあるを、まづ慌て見れば、右衛門督局の文細かにて、下りし後の御日記、御探題の短冊下し賜る。目もくれて、読みも解かれねば、律師に読ませて泣き居たり。か、らぬにだに酔<sup>あ</sup>泣きはする癖に、ましてかやうに仰せ下さるれば、とどめがたき涙ならむかし。探題に

旅といふことをとて、

(中略)

十二月一日、東へ便ありとて。文書く所にて。

今も猶なほ木綿付鳥なをの音をや鳴く言ひしに変わる心ならずは

此歌は、下侍し時、御会に、「かねてより木綿付鳥の音をぞ鳴く越えむ日近き関のこなたに」とよみ侍しことを思し召し出たるなめり。とりあへぬ涙の紛れに、

逢坂の木綿付鳥よいつまでと関路隔て、音を尽すらむ

以上の経緯に鑑みると、東宮が雅有を優遇する理由は、蹴鞠の師範と親しむためだけではない。皇位継承に関する事項を鎌倉で活動する雅有を通じて伝えることも、東宮は望んでいたためではないだろうか。

#### 四、雅有の東宮への思い、およびその表現方法

雅有は『春の深山路』の最後で、彼が都から鎌倉へ下る旅について詳しく記録している。以下は、この部分の東宮に触れる箇所を取り上げて、雅有の東宮への思い、および

その表現方法について検討する。

十一月十四日明け方に、雅有は都を出ようとしているところ、法勝寺の辺りから東宮御所を眺めて、東宮御所への未練を和歌で表現する。

A 春の宮の梢明け暗の雲の絶え間にほの見ゆれば、  
慣れ慣れし宮木の梢今朝だにもよそに隔つる明け  
暗の空

ただ涙のみぞ、まづ行く道の先に立ちぬる。

十四日夜、鏡の宿(2)に泊まって、旅の枕の上で内裏・東宮御所・自分の家を思い出す。

B 道すがらは、行きかふ旅人、このもかもの山河木草などに目移るだに、なほ来し方は忘れぬ習ひを、まして取り静めぬる草の枕の淋しさに、つくづく思へば、雲の上、春の宮の中、これに添はれる私の蓬が本まで、思ひ残さず、恋しく哀れなり。遊女あそびども来て歌ひのしれど、心にも入らねば、人を出だしてぞ遊ばする。月はいと雲もなく、鏡の山に影見ゆれど、心はかき暗してぞある。

立ち寄れば月にぞ見ゆる鏡山しのお都の夜半のお

もかけ

十五日、愛知川<sup>(22)</sup>という所に入る。ここで雅有は、

C つくづくと思ひ出づれば、ただ今は御学問の程にや。下り待らずは、廂に出御待ち顔にて、ながめ居ましとまでおぼゆるぞ、あまりけしからぬ心なるや

と、今の時間の東宮の活動や、下向しなかったなら今自分がしているはずの仕事を想像する。また、こういう東宮への思いはあまりに常軌を逸していると自ら反省する。

十六日、不破の関を見て、東宮の即位の時に行われる「固関」<sup>(23)</sup>を想像することになり、涙を流す。

D 不破の関屋を見れば、東宮のいつとなく待ち遠にのみ思したる御即位の時は、この関をも固めこそはし侍らむかしと思へば、涙ぐまる。

十七日、美濃と尾張国の境のあたりに着く。高桑の宮<sup>(24)</sup>を見て、

E 高桑の宮として、雅成親王<sup>(25)</sup>の御荘にておはしき。宮と

申す名もむつまじくて、急ぎ見やれば、ただ白砂の岸遠くして、青松の垣の跡のみあり。いとど慰む方なし。いづくに移ろひ給ひにけむと、その事となく哀れなり。

と述べる。なつかしいと感じるのは、東宮のことを思い出したからだろう。十八日から二十三日までの記録が極めて簡略であるため、雅有の心持ちは詳しく知れない。

二十四日、雅有は伊豆国の三島大社に着く。伊予国にも三島神社があるが、その伊予の三島は伊豆の三島を本神と考えている。一方、伊豆の三島は伊予を本社とみなしている。こういうことから雅有は『日本書紀』に記される仁徳天皇と菟道稚郎子<sup>(26)</sup>との皇位を譲り合うことを思い出す。さらに、『日本書紀』の話を踏まえて、今世の人々の争いが恥ずかしいと述べる。この段は、当世の持明院・大覚寺兩統の争いをほのめかしているだろう。

F これは三島の明神にておはします。伊予の三島よりはこの三島を本神と申し、これよりは伊予を本社と申すなるこそ、いとめでたけれ。仁徳天皇と東宮と位を互に譲りおはしまし、ことも思ひ出でられて、今の世の人の、我々と争ひいふこそ恥づかしけれ。

また、三島大社で「かたじけなき人の御事」（東宮の皇位継承のことだろう）を占う。

Gこの家主人、巫女みこの第四の座とかや、ゆゝしくまされし童巫女わらはかんなまある由申せば、試みむと思ひて、呼ばせて神下させて、人して問はす。「身の訴へあり。」「やがてかなふべし。」「官達の所望あり。」「すこし遅くあらむかし。始終は喜びあるべし。」「又かたじけなき人の御事を鎌倉にて申さむと思ふ、いかゞあるべき。」「めでたかるべし。」「構へて喜びどもして、明年の秋より先に、京へ帰し上せ給へ」と申せば、「『やすき事。』と仰らる」と申せば、まづ嬉しくて、「思ふごとくかなひて、秋より先に帰り上らむ時は、喜び申すべし。よく／＼祈れ。」とぞ申しやる。

右で見えるとおり、雅有は旅で、ほぼ毎日東宮・東宮御所を思い出して、または東宮の皇位継承のことを心配している。ところが、このような深い思いの表現方法は、極めて率直と言えよう。A・B・Dではすべて直接に「春の宮」「東宮」を書き出して、C・E・Gではやや婉曲な表現を使っているが、それほど難解ではない。古典を踏まえるのはFのみである。

ただしFに見える『日本書紀』への言及も、単に古典を用いるものとみなしてはいけない。雅有が『日本書紀』の説を引用して、「背面26（そとも）」という言葉を東宮に解釈することが『春の深山路』弘安三年六月一日条に見られる。

ことのついでに「背面」といふこと、日本紀の説を申し入るれば、御興あり。

また、雅有は弘安三年七月十二日に東宮へ『日本書紀』を進講する。

十二日、召しありて坊に参る。内々日本紀講ぜらるる故なり。身にあててしかるべからざることなり。いまだ師説を受けず。ただ好むばかりなり。伯三位資緒卿27、これを読み上ぐ（『春の深山路』七月十二日条）。

七月廿九日、雅有は藤原資季に『日本書紀』『源氏物語』の難語について尋ねる。

廿九日、二条大納言入道資季卿28の許に向ひて、日本紀・源氏の物語難義ども、又出仕方の事ども、日暮し

尋ね聞きてぞ、夜に入りて、内裏・東宮へは参りぬる

〔春の深山路〕七月廿九日条。

つまり、Fで雅有が『日本書紀』に触れたのは、弘安三年に『日本書紀』を研究し、東宮御所で進講するという彼の現実経験と直結しているのである。

『春の深山路』の旅を記す部分で、『日本書紀』を踏まえるのは五箇所、『源氏物語』を踏まえるのは四箇所、『伊勢物語』を踏まえるのは五箇所がある。雅有は古典の素養に優れた人である（飛鳥井雅有の日記と趣味生活）。彼自身の日記『嵯峨のかよひ』『仏道の記』は『源氏物語』をふまえたところが多いと指摘されている（飛鳥井雅有と『源氏物語』——嵯峨の通ひと『仏道の記』を中心に——）。また、同時代の紀行文『十六夜日記』や『とはずがたり』紀行部分には『伊勢物語』への言及が多く見られると指摘されている（『とはずがたり』の物語性をめぐる一考察——『十六夜日記』鎌倉紀行との比較を中心に）。当時では日記・紀行文で『源氏物語』『伊勢物語』を踏まえるのは珍しくないだろう。しかし、それに対して、『春の深山路』に先行する紀行文のなかで、『日本書紀』へ言及するものは、多くないようである（文末の表を参照）。なお、雅有自身も、彼の紀行文において『春の深山路』を除き、『日本書紀』を用いたこと

がない。

『春の深山路』はその題名が示すとおり、「春の宮」の御所へ通う経験、「春の宮」への思いを中心とする日記である。率直に思いを表す部分は言うまでもない。『日本書紀』への複数の言及も、一見すると古典を用いているだけだが、実際は雅有の東宮御所での現実経験、すなわち、『春の深山路』の主題とつながっているだろう。

むしろにかえて…雅有が『春の深山路』を

書いた理由

本論文の内容をまとめると、雅有は『春の深山路』で東宮との親しさや、東宮の即位を待ち望む気持ちを表している。蹴鞠の面における東宮の配慮・優遇が、雅有の東宮に傾倒する理由の一つだと指摘できる。一方、東宮が雅有を優遇する理由は、師弟という個人的な関係のほかにも、関東祇候の廷臣である飛鳥井家を通して、幕府との疎通を図るためだと考えられる。

第一章で述べたとおり、飛鳥井家は雅有が『春の深山路』を記す前に、持明院統・大覚寺統のどちらに傾くかを明らかに示したことがない。雅有が『春の深山路』で東宮の即位に高い関心を示すことは、政治的な立場を明確化

させる行為ともいえる。持明院統・大覚寺統の中で明確に持明院統を選択した雅有は、東宮の即位後にそれなりの報いを得、父親・祖父の官位を超えて、正二位民部卿に至った。

しかし『春の深山路』の創作の目的を単純に政治的な立場を明確にするためとみなすのは、一面的である。東宮熙仁親王は政治的な面で飛鳥井家に意義が大きいだけでなく、雅有個人の人生にとっても重要である。第一章で述べたとおり、文永三年（一二六六）四月に雅有の父・教定がなくなつた。七月には雅有が幼少より仕えてきた宗尊親王は將軍を廢されて、京へ送還された。宗尊親王はさらに文永十一年（一二七四）に京で逝去した。その翌年の建治元年（一二七五）に雅有は京から鎌倉へ東下した。そして、この旅の経験に基づいて『みやぢの別れ』を執筆した。佐藤智広氏が指摘したとおり、『みやぢの別れ』は表層的には都との別れでありながら、その背後には、宗尊親王へ向かう路との別れが内在している（飛鳥井雅有『みやぢの別れ』執筆の背景）。

幼少より仕えてきた將軍・宗尊親王を失った雅有は、飛鳥井家と自分の人生の新しい方向を探さなければならぬが、その矢先に息子・雅頭を弘安元年（一二七八）に亡くした。彼が『春の深山路』冒頭に「過ぎにし三年の程は、

うち続き心の闇にのみ暗されながら……」と記したとおり、弘安三年正月に東宮に出仕するまで、雅有は憂鬱な心持ちが続いていた。

この憂鬱な状態を変えたのは東宮御所に仕えることである。蹴鞠を含むいろいろな面で東宮熙仁親王の優遇を受けた雅有は、自身および飛鳥井家の新しい道を見つけた。弘安三年は雅有の人生の転換点とも言える。そして『春の深山路』は、まさに彼の人生の転換期である弘安三年の年始から年末までの全記録である。

本論文第四章で分析したとおり、『春の深山路』は表層的に前半三分の二が東宮御所に仕える都での生活、後半三分の一が鎌倉へ東下する旅日記を記すが、その背後に「東宮」という主題が貫いている。狭義的な「紀行」、つまり旅を記す部分が『春の深山路』の後半三分の一に限られるとはいうものの、『春の深山路』の全体は、雅有の一人の親王（宗尊親王）と別れ、もう一人の親王（東宮）へ向かう人生の紀行である。

## 引用文献

『春の深山路』『東関紀行』——『中世日記紀行集』新編古典文学全集・四八、小学館、一九九四年。

『伏見天皇宸記』——笹川種郎編、矢野太郎校訂『花園天皇宸記二・伏見天皇宸記』史料大成統編・三四、内外書籍株式会社、一九三八年。

『内外三時抄』——渡辺融・桑山浩然『蹴鞠の研究―公家鞠の成立―』東京大学出版会、一九九四年。

『遊庭秘抄』——『群書類従』第十二集、経済雑誌社、一九〇〇年。  
蹴鞠の専門用語の解説は『蹴鞠の研究―公家鞠の成立―』事項索引による。

家系は黒板勝美・國史大系編修會編『尊卑分脈』（吉川弘文館、一九六六年）による。

官位は黒板勝美・國史大系編修會編『公卿補任』（吉川弘文館、一九六四年）による。

## 参考文献

扶桑社・霞会館編、渡辺融監修『蹴鞠』霞会館、二〇一五年。

渡辺静子・芝波田好弘・青木経雄評釈「飛鳥井雅有日記」「春のみやまち」『中世日記紀行文学全評釈集成』第三卷、勉誠出版、二〇〇四年。

水川喜夫『飛鳥井雅有日記全釈』風間書房、一九八五年。

外村南都子校註・訳「春の深山路」『中世日記紀行集』新編古典文学全集・四八、小学館、一九九四年。

佐藤智広「飛鳥井雅有『みやちの別れ』執筆の背景」『昭和学院国語国文』三十七号、二〇〇九年。

中川博夫「藤原教定について（上）——関東祇候の廷臣歌人たち（一）——」

『中世文学研究』、中四国中世文学研究会、一九九〇年。

井上宗雄「飛鳥井雅有の日記と趣味生活」『國文學・解釈と教材の研究』学燈社、一九六五年。

河野有貴子「飛鳥井雅有と『源氏物語』——『嵯峨の通ひ』と『仏道の記』を中心に——」『広島女学院大学国語国文学誌』三十七号、二〇〇七年。

柳町敬子「『とはずがたり』の物語性をめぐる一考察——『十六夜日記』鎌倉紀行との比較を中心に——」『立教大学大学院日本文学論叢』六号、二〇〇六年。

| 名所                                      | 逢坂                                                                | 醒井                                                             |
|-----------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|
| 『日本書紀』における典拠                            | 仲哀紀、神功皇后紀                                                         | 景行紀                                                            |
| 『春の深山路』の旅を記す部分における、『日本書紀』に触れたところ        | 昔神功皇后の御代に、忍熊王の謀反によりて。武内大臣追ひ来て、ここにて行き会ひて打ちたりしより、逢坂とは申す由、大和文には見えたり。 | 昔の日本武尊の伊吹の神の氣に心地損へり給ひけるに、この水にて心地直り給へるより、醒井と名付くる由、日本紀といふ文に見えたり。 |
| 『日本書紀』の同じ箇所を用いた、先行する紀行文 <sup>(29)</sup> | 限られた範囲（文末注二十九を参照）で調査した結果によれば、見つかっていない                             | 見つからない                                                         |

| 墨俣                                                                                           | 熱田の宮                                                                                 | 三島大社                                                    |
|----------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
| 神代下                                                                                          | 景行紀                                                                                  | 仁徳紀                                                     |
| 暮れて墨俣といふ所に着きぬ。（中略）天の鳩舟の飛び翔りけむもかくやとぞ聞き居たる（「天の鵠（はと）舟」は『日本書紀』神代下で「熊野の諸手船（もろたぶね）」の別名とされる船の名である）。 | 熱田の宮は、昔日本武命東を平らげ給ひし時、（中略）天の早斬りの剣にて草を薙ぎて逃れ給ひしかば、その剣を草薙ぎの剣と申しき。                        | これは三島の明神にておはします。（中略）仁徳天皇と東宮と位を互に譲りおはしまし、事も思ひ出られて、（以下省略） |
| 見つからない                                                                                       | 『東関紀行』<br>又いはく、「この宮の本体は、草薙と申し奉る神剣なり。景行の御子、日本武尊と申す、夷をたひらげて帰り給ふ時、（中略）剣は熱田にとまり給ふ」ともいへり。 | 見つからない                                                  |

- (1) 『もがみの河路』は和歌を中心に綴った短い作品である。雅有の都を恋しく思う気持ちと、故郷や鎌倉に対する感慨は読み取れるが、その思慕・感慨の対象を特定の人に絞ることが難しい。『みやちの別れ』に見える雅有の都恋しさの背後には、幼少より仕えた宗尊親王との別れが内在していると、佐藤智広氏（飛鳥井雅有『みやちの別れ』執筆の背景）が指摘する。しかし『みやちの別れ』では、雅有は自分の追憶する人が宗尊親王であることを明示していない。
- (2) 教定は関東祇候の廷臣として、朝暮という二重的な身分を持っている。そのため、鎌倉を本拠にして活動していたとはいえず、彼の幼年期・青年期には、京での活動や一定期間の滞在も確認できる（「藤原教定について（上）」関東祇候の廷臣歌人たち（一））。雅有も十二歳の時、後嵯峨院の会で上鞠を勤めた記録が見られる（『内外三時抄』）。雅有の幼年は、京と無縁であるわけではない。
- (3) 『嵯峨のかよひ』十一月廿六日条で、為家が無文燠革鞆を着用したことが確認できる。
- (4) 藤原成通。
- (5) 藤原頼輔、雅経の父、雅有の高祖父。成通の蹴鞠の弟子。
- (6) 十四世紀中期に成立したか。作者は二条為定（為世の孫）と伝わっているが、さらなる考証が必要である。
- (7) 弘安三年正月十九日。
- (8) 「院」は後深草院を指す。「新院」は亀山院を指す。当時は亀山院の院政下にある。
- (9) 冷泉富小路殿の後深草院御所にあった鞠庭。
- (10) 近衛家基。当時は正二位、内大臣である。
- (11) 雅有は明示していないが、『春の深山路』の注釈書の「飛鳥井雅有日記全釈」・『中世日記紀行文学全評釈集成』第三巻はこの観点を持つ。
- (12) 奉行…ここでは鞠会を執り行う役目を指す。『春の深山路』で蹴鞠の奉行を担当したと確認できるのは、藤原重清（藤原長良孫）、洞院公守、二条為氏の三人である。確かに重要な役目であるが、必ずしも蹴鞠の「重代の家」（難波家・飛鳥井家・御子左家）出身の者が務めるわけではない。
- (13) 上鞠渡し…為世と雅有との間に起こった上鞠をめぐる確執を指すのか。
- (14) 難波宗継の曾祖父・難波宗長は嫡流として藤原頼輔の跡を継いだ。雅有の祖父・飛鳥井雅経は宗長の弟である。飛鳥井家は難波家の庶流である。
- (15) 上鞠事件が起こった、正応二年三月二日のこの鞠会に出席する難波家（難波宗継）、御子左家（京極為兼・二条為実・二条為雄）の人々の官位…難波宗継の当時の官位は不詳だが、極位極官は正四位下左少将、刑部卿である。二条為実は当時、正四位下左中将である。

二条為雄は当時、正四位下加賀権介である。

京極為兼は当時、正四位下参議である。同年四月に従三位に叙せられる。同年十二月に正三位に叙せられる。その後も昇進がはやく、正応四年七月に権中納言に補任され、正応五年七月に従二位に至る。

- (16) 鞠場に立てられた樹木。障害物であるとともに、鞠がそれないようにする障壁でもあった。

- (17) 『春の深山路』原文「廿一日、鎌倉より使あり。下べき由なり。思設けたる事なれど、さしあたりは胸拉ぐる心地す。」雅有は鎌倉下向の理由について言及していない。

- (18) 雅有は鎌倉へ下る途中で、即位にあたって不破の関で行われるべき警固の儀や、仁徳天皇と弟・菟道稚郎子とが皇位を互いに譲る故実に対して、関心を示している。こういう雅有の東下途中で示した関心から見れば、東宮が伝えたい事項は皇位継承と関わっていると、推測できるだろう。

- (19) 後深草院右衛門督局。源時経女。伏見院の琵琶師範。

- (20) 「今もなほ」は、東下の前に雅有が東宮御所の歌会で詠んだ歌「かねてより」に対して東宮が詠まれた歌。

- (21) 歌枕。現在、滋賀県蒲生郡竜王町鏡。宿駅の一つ。「鏡山いざ立ち寄りて見て行かん年経ぬる身は老いやしぬると」(古今集・八九九)が有名である。

- (22) 現在、滋賀県愛知郡愛荘町。

- (23) 固関(こげん)のこと。天皇の即位・讓位、天皇・上皇の崩御、内乱などの時、鈴鹿・不破・越前愛発(のちに逢坂)の三関を閉じること。形式化しているが、当時も行われていたもの

とみられる(『中世日記紀行集』注釈による)。

- (24) 現在、岐阜県岐阜市柳津町高桑。

- (25) 雅成親王(一二〇〇～一五五)。後鳥羽院の皇子。承久の乱で但馬国へ配流される。配流所で没した。六条宮・但馬宮とも。実際は、高桑宮は惟明親王(後鳥羽院の兄宮、承久三年(一二二一)没、四十三歳)の曾孫である(『中世日記紀行集』注釈による)。

- (26) 光の射す南(影面(かげおも))に対して、その背面の意。北側。「山の陽(みなみ)を影面と曰ふ。山の陰(きた)を背面と曰ふ」(日本書紀・成務五年九月)(『中世日記紀行集』注釈による)。

- (27) 資緒王(一二五〇～一二九七出家)。花山源氏、資基王男。従三位、三十一歳。

- (28) 藤原資季(一二〇七～八九)。七十四歳。蹴鞠を含む、いろいろな故実に詳しい人だと雅有が評価する(『春の深山路』一月廿二日条)。

- (29) ただし、『中世日記紀行集』(小学館)、『中世日記紀行文学全評釈集成』第二・三卷(勉誠出版)、『土佐日記』(小学館)の注釈に限って調査した結果。

本論文は、国際研究会「(紀行)研究の新展開」(二〇一三年二月、オンライン開催)における口頭発表の成果をまとめたものである。その際多くの方々から御教授を賜った。記して御礼申し上げる。本研究はJSPS科研費21H00506・23KJ1427の助成を受けたものである。